

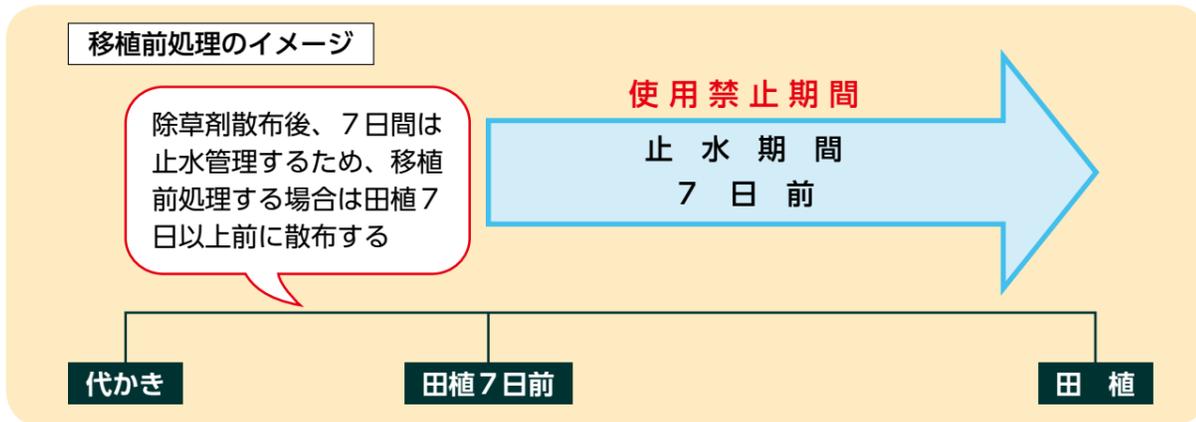
■除草剤使用の注意点について■

【重要】

1 初期剤の使用に注意

水質汚染の懸念等から移植前に使用する全ての初期剤について止水期間7日間を確保するよう、初期剤の移植前使用時期を「植代時から移植7日前まで」とする通達が農林水産省から出されており、昨年夏ごろから初期剤の使用時期について順次、登録変更がされています。田植え時に落水することを考慮すると、田植え前に初期除草剤を使用する場合は、田植えの7日以上前に使用する必要がありますので注意が必要です。

※農薬ラベルの使用方法が「植代時から移植4日前まで」と記載されている場合でも、「植代時から移植7日前まで」に使用してください。



※秋田県では水田初期除草剤の移植前処理は行わないよう指導しています。やむを得ず、移植前処理をする場合は、止水期間7日間を遵守しましょう。

2 除草剤散布のポイント

○代かき、あぜ塗りは丁寧に

- ・田面の凸凹がなくなり均平になるよう耕起・代かきは丁寧に行う。
- ・ネズミ穴や崩れがないよう丁寧にあぜ塗りし、漏水防止に努める。

○水管理

- ・散布前に、水口、水尻をしっかり止め、3～5cm程度の水深を確保する。
- ・除草剤散布後、7日間は落水やかけ流しをしない。

○適期散布

- ・雑草の葉齢にあわせて処理適期に散布する。

○ジャンボ剤、フロアブル剤

- ・除草剤がうまく拡散するよう、水深は深めにする（5～7cm程度）。
- ・フロアブル剤、ジャンボ剤は表層剥離やアオミドロが大量発生する前に散布する。

※農薬散布にあたっては、農薬のラベルをよく読んで使用してください。



No. 1

農業技術情報

平成25年4月発行

監修：仙北地域振興局農林部農業振興普及課



■ばか苗病対策について■

ここ数年、ばか苗病の発生が増加傾向にあります。

今年も積雪が多く、浸種時期の低温などにより種子消毒剤の防除効果が十分確保されない可能性がありますので、浸種開始時期や水温等に十分留意し、計画的に作業を行いましょう。また、温湯消毒種子には生物農薬を併用するなど万全な対策で平成25年をスタートしましょう。

■育苗期の被害状況

一般的には2葉期から発生が見られますが、早い場合は1葉期から葉身が黄化、徒長します（図1）。

■本田期の被害状況

分けつ盛期までに葉鞘や節間が著しく伸び、全身が黄化し、葉の着生角度が大きく開いた感じになります（図2）。葉鞘をむくと、地上部の節から発根（2段根）が見られます。発病株は穂ばらみ期頃に枯死しますが、葉鞘上には白色粉状の胞子が多量に付着しており、周囲への感染源になります（図3）。発病が遅いと登熟期まで生き残りますが、穂は短く、着粒数も少なくなります。



図1 育苗期の発生状況



図2 本田(6月上旬)の発生状況



図3 枯死株に付着した白色の分生胞子

安心のネットワーク
NOSAI 仙北から

園芸施設共済

水稲育苗ハウス全棟ご加入を!



なんととっても
安心が一番!

例) 設置面積30坪(補償期間2ヶ月)
補償金額 178,000円
掛金はわずか1,117円です。

～ばか苗病の防除には環境衛生の徹底と適切な種子消毒が重要です～

■ 周辺環境衛生の徹底

- ・ばか苗病は浸種、催芽、出芽時に感染するため、作業をする作業舎や育苗ハウス、その周辺から伝染源となる稲わら、籾殻、米ぬか、粉塵等を除去し、清掃しましょう。
- ・浸種・催芽に使用する機器や容器は、使用前・使用後に十分に洗浄しましょう。
- ・消毒前の種子と消毒後の種子は同じパレットやシート等に置かず、消毒後の種子を載せるパレットやシートは十分に洗浄したものを用品しましょう。
- ・周辺からの病原菌の侵入を防ぐため、浸種・催芽時に容器にフタをしましょう。

■ 適切な種子消毒・浸種・催芽

○ 薬剤吹き付け種子消毒のポイント

- ・種子表面に付着した薬剤が浸種後水に溶け出し、種子周囲の薬剤濃度が高まった状態で消毒効果が発揮されるため、浸種開始後2日間は種子袋をゆすったり、水の掛け流し、循環や交換は絶対にしないでください。その後の水の交換は2～3回とし、水の掛け流しはしません。
- ・浸種時の水量は種子容量の2倍程度とし（種籾1kgに対し、約3.5L）、浸種水温は10～15℃に保ちましょう。

○ 温湯消毒種子のポイント

- ・温湯消毒種子は清潔で過湿にならない場所で保管してください。
- ・温湯消毒種子単独の防除効果は化学合成農薬に比べ劣るため、温湯消毒種子と生物農薬（タフブロック等）を組み合わせましょう。
- ・出芽時および育苗初期の低温（10℃以下）により、温湯浸漬や生物農薬の防除効果が低下する場合がありますため、温度管理を徹底しましょう。

○ 共通事項

- ・浸種に使う水は、水道水または地下水を使用しましょう。
- ・複数の品種や消毒方法の異なる種子を同じ容器で浸種・催芽しないでください。
- ・催芽温度は30～32℃で行います
- ・ハトムネ催芽機を使用した循環催芽は、発病が多くなる場合がありますため注意します。
- ・出芽までの温度が低いと発病が多くなる場合がありますため、被覆資材等による保温に努めましょう。
- ・水温が10℃を確保できない場合は、お湯を使うなどして、10～15℃の水温を維持します。

■ 採種ほ場周辺での注意点

採種ほでは皆様へ健全な種子を届けるため、非常に細やかな管理が行われています。採種ほ内はもちろんですが、採種ほの周辺500m以内から、ばか苗病の発病株が確認されると種子として認められなくなり、優良種子が供給できなくなってしまいます。採種ほ周辺に水稻を作付けする方は以下の点に留意し、地域全体で優良種子生産に取り組みたく、ご協力願います。

- ①採種ほ周辺では化学合成農薬による種子消毒を行ってください。
- ②育苗中や田植え後にばか苗症状を確認したら、直ちに営農センターへご連絡ください。

■ 天の恵をケイ酸で補いましょう ■

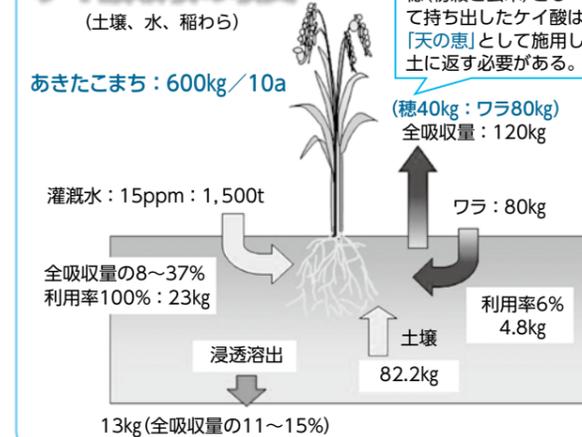
稲はケイ酸植物とも言われ、稲が吸収するケイ酸の量は、窒素成分の約10倍となる120kg/10aにもなります。

吸収するケイ酸は土壌や用水、稲わらすき込みに由来します。しかし、稲刈りで持ち出す玄米や籾殻に含まれるケイ酸については、土壌改良資材で補給しないと、年々、土壌中のケイ酸含有量は減少しますので、持ち出したケイ酸は「天の恵」としてケイ酸資材を投入し、補う必要があります。

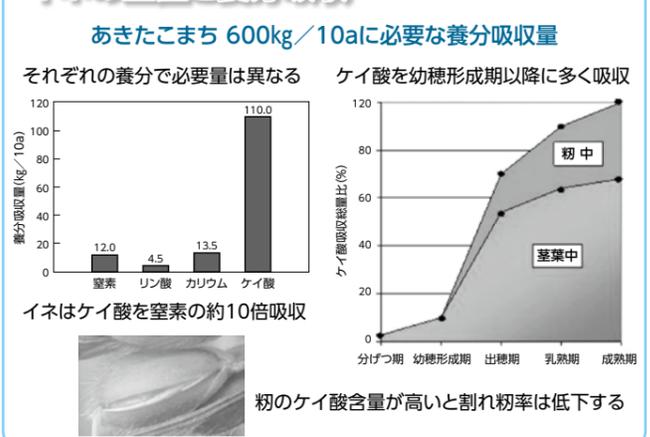
○ ケイ酸施用により期待できる効果

- ・ケイ化細胞が強化され茎葉が硬くなり、倒伏・病害・異常気象に強い稲になります。
- ・葉の厚みが増し、直立して光合成能力が向上することから、デンプンの蓄積が増大します。登熟歩合や千粒重の増加が期待でき、良食味米生産に繋がります。
- ・高温時には、葉身からの蒸散が増えることで葉温上昇を抑え、稲体の消耗を減らすことができます。また、白粒発生が軽減が期待できます。
- ・籾殻が大きくなり、ふ割れが減ることから、カメムシ被害の減少が期待できます。

ケイ酸吸収の収支



イネの生産と養分吸収



主なケイ酸資材（土づくり肥料）

資材名	保証成分 (%)	10aあたり 施肥量(基肥)	備考
おばこロマン大地	リンサン：5 苦土：3 ケイ酸：15 アルカリ：25	60～80kg	20kg袋 ケイサンエース70%配合 J A 秋田おばこ推奨肥料
けい酸加里	加里：20 苦土：4 ケイ酸：34 ホウ素：0.1	40～60kg	20kg袋 く溶性加里と可溶性ケイ酸 で効率良く吸収
粒状ケイカル	ケイ酸：30 苦土：3 アルカリ：44	160～200kg	20kg袋 1袋当たりのコストが安く、 経済的